

第一朗読 (使徒言行録16章22—34節)

22 群衆も一緒になつて二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。23 そして、何度も鞭で打つてから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。24 この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

25 真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたつて神に祈っている、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。26 突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。27 目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。28 パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」29 看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、30 二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」31 二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」32 そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。33 まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行つて打ち傷を洗つ

てやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。34 この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になつたことを家族ともども喜んだ。

福音 (ヨハネ16章5—11節)

5 今わたしは、わたしをお遣わしになつた方のもとに行こうとしているが、あなたがたはだれも、『どこへ行くのか』と尋ねない。6 むしろ、わたしがこれらのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている。7 しかし、実を言うと、わたしが去つて行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去つて行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところへ送る。8 その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。9 罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなることに、11 また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。

朗読から祈りへ

—主の言葉—

看守はすぐに洗礼を受けたように見えるが、それまでには大切な過程がある。捕らえられて牢に入れられていたパウロとシラスに奇跡的な出来事が起こる。囚人たちが逃げてしまったと思ひ込んだ看守は自殺しようとする。「皆ここにいる」と大声で叫んだパウロの言葉で看守は踏み止まり、二人を「先生方」と呼び、「救われるためにはどうすべきか」と尋ねる。二人は「主イエスを信じる」ように勧める。そして看守とその家の人たちが全部に「主の言葉」を語る。看守は二人の傷を洗うが、彼とその家族は主によつて洗われ、洗礼を受ける。その後、皆で食事をし、神を信じる者になったことを喜び合う。

看守とその家族が洗礼を受けるまでの過程の中で重要なポイントがある。それはパウロとシラスが「主の言葉」を語ったこと。

まず、事実がある。出来事がある。出来事の中に主が共にいてくださることを教える人がいる。「皆ここにいる」、そこには「主が

共にいる」ということではないだろうか。パウロとシラスが語った「主の言葉」とは「主イエスは復活して、わたしたちと共にいる」ということ。その言葉を信じた人は愛の行動に走る。打ち傷を洗つてやった看守は、主みずから洗われることになる。それが喜びを分かち合うことにつながる。

ミサを想う。事実、現実、出来事を体験して人々は共に集う。そこで「主の言葉」を聞く。今、復活した主イエスが共におられることを信じる。たびたび「主は皆さんとともに」という司祭の呼びかけに答えながら、復活の信仰を新たにする。主の食卓を囲み、主を食べて喜びに満たされた人は、また現実の出来事の中に派遣されていく。「主は皆さんとともに」という言葉と共に祝福を受けて。「主の言葉」がないと生きていけない。

—弁護者・助け手—

主イエスは弟子たちから去り、父のもとに行く。そして弟子たちを支える「弁護者」を送る。弁護者は「罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。」

弁護者はパラクレートスの訳語。「苦しむ

者を助けるために呼ばれたもの」という意味から「助け手」とも訳されている。弁護者、助け手であるということは主体は弟子たちだということになる。もはや世にあつて証しをするのはイエス自身ではない。これからは弟子たちが証しをする。弟子たち、つまりキリスト者と呼ばれるわたしたちの使命。主はわたしたちに弁護者、助け手を送り、わたしたちを通して世の誤りを明らかにする。

他人ではない、このわたしが世の誤りを明らかにすることを思うと身震いする。

弁護者をいただき、神からの助けをいただくとしても、世に対峙することには恐れがある。「告別説教」の第二部のこの教えは次の言葉で締めくくられている。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによつて平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(一六三)。

キリストの弟子たちから受け継がれてきた復活の信仰は「世」の誤りを明らかにしてきた。それは多くの殉教が表しているように、死をも恐れず、それを乗り越える強い信仰であった。現代に生きるキリスト者。その使命は今も変わらない。

(M・Y)